

## 心あたたかいお盆に

詩人の坂村真民先生の詩とご縁をいただいたのは、昭和五十六年のことでした。もう四十四年前になります。和歌山県新宮市に生まれ育ち、高校二年生であった私が、たまさか立ち寄った書店で『生きてゆく力がなくなる時』という書物を見つけて手にとったのでした。この本の題名に心ひかれました。

私は、お寺の生まれではないものの、小学

生の頃から坐禅に親しみ、中学生の頃には、松原泰道先生にめぐりあい、仏教や禅に関心を持って学んでいました。山田無文老師にお目にかかったのは高校一年の時でした。そんな私にとっては、当時「受験戦争」などと言われていた風潮にはなじみずらいに思った。なんとも言えぬ生きづらさを感じていた頃に、この題名の書物に心ひかれて読んだのでした。



心しずかに  
言葉おだやかに  
行いゆるやかに

円覚南庵

### 円覚350号 目次

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 横田管長のお話               |    |
| 「心あたたかいお盆に」           | 1  |
| 管長のページ                | 8  |
| 信心ことはじめ④⑨             | 10 |
| 明治居士列伝⑦／蓮沼 直應         | 12 |
| 知り合いが亡くなった／桜井 竜生      | 16 |
| 円覚寺の至宝⑮               | 20 |
| 精進料理レシピ／藤川 譲治         | 22 |
| 羅漢講式レポート～導入編～／横山友宏・由馨 | 24 |

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所

一読して深く感銘を受けました。生きてゆく力がなくなる時というのは、こんな本を出される先生でもあるのだと勇気づけられたような思いでした。

その頃、本の奥付にはまだ著者の住所が書かれていた時代でしたので、愛媛県砥部町にお住まいの先生に手紙を差し上げたのが、ご縁の始まりでした。

すぐさま返信をいただき、「念ずれば花ひらく」の色紙と『一遍上人語録 捨て果てて』を送っていただいたのでした。

そしてそれ以来毎月真民先生が発行されていた個人詩誌『詩国』を送っていたくださうになりました。大学を卒業するまで六年間毎月『詩国』を送ってもらい、その感想を送ったりして、手紙のやりとりをさせていただいていました。

その後、大学を卒業してすぐに修行道場に出かけた私は、真民先生にその旨をお伝えし、しばらくご縁が途切れました。それから十数年の修行を経て、円覚寺僧堂師家という修行僧の指導をする役目に就き、同時に円覚寺内にある黄梅院の住職にもなりました。

その時に、真民先生にも手紙を書こうかと思いながらも、もう九十歳になるご高齢の先生を煩わせては申し訳ないと思って控えました。その代わりに、長年にわたりお世話になってきたご恩返しにと、黄梅院の掲示板に毎月真民詩を書くようにしました。以来二十年、コツコツ毎月全詩集を繙いては、真民詩を書いてきました。

真民先生は、その後九十七歳でお亡くなりになりました。そして二〇一二年には砥

部町に坂村真民記念館ができました。その頃、真民先生の三女である西澤真美子さんからお手紙をいただき、坂村真民記念館の館長の西澤孝一さんともご縁ができました。

五年前の二〇二〇年、記念館八周年記念として「鎌倉・円覚寺黄梅院の掲示板の詩」横田南嶺老師と坂村真民の心の交流」と題した特別展を催してもらいました。なんという幸せでありましょうか、めぐりあいの不思議を思わざるを得ません。二〇一九年の三月からは、黄梅院のみならず円覚寺総門の下にも詩を書くよ



うになりました。そうして二十六年間に選んで書いた詩は、なんと三百七十遍にもなるのです。

そんなさやかな行いが、この三月に「慈悲の心と生きる喜びを」横田南嶺老師が選ぶ真民詩の世界」という記念館開館十三周年記念特別展になろうとは、夢にも思わなかったことです。めぐりあいの不思議をしみじみ思います。

三月八日に、記念館で開会式が行われ、そのあと講演をさせてもらいました。開会式には砥部町の古谷崇洋町長もお見えになって挨拶をなされていました。私もご挨拶をさせていただきますました。記念館は砥部町立で、砥部町の皆様で大切に守られてきていることに感謝します。

その日がちょうど三月八日だったので、

「三月八日」という詩をはじめに読みました。それは真民先生にとつての最初のお子さんのお誕生日であり、ご命日でもあります。昭和十年清州高等女学校の教師として朝鮮で働いていた真民先生は、二十六歳で、ご結婚なされます。昭和十六年三月、夫婦に待望の女の子が生まれますが、なんと死産だったのです。

真民先生夫婦は、その子に「茜」という名前を付け、それ以来毎年この「茜ちゃん」の誕生日であり命日である三月八日を大切な日として、過ごしてきたのです。

### 三月八日

三人の娘を嫁がせ終わって  
わたしたち二人の思い出は  
今も賽の川原で



ひとり遊んでいる

茜のことにおよぶ

きょうは天気がいいので

歩いて四十八番札所の

西林寺にお参りする

茜よお前の命日の三月八日は

観音日であるし

十一面観世音菩薩と刻んである

梵鐘を撞いて

お前の冥福を祈る

乳も飲まずに

あの世へ行ってしまった茜よ

お母さんの撞くこの鐘の音を

じっときいてくれ

そしてわたしたちがくるまで

お地藏さんと一緒に遊んでいてくれ



私もこの日は、記念館に行く前に西林寺にお参りして、この詩を思い起こしていました。真民先生六十六歳の時の詩で、全詩集巻三巻にあります。

真民先生ご夫妻は、亡くなった茜ちゃんのことを晩年までずっと大事に思い続けていたのです。真民先生の深い愛情を思います。

哲学者の西田幾多郎先生は生涯で五人のお子さんを亡くされています。「何とかして忘れたくない、何か記念を残してやりたい、せめて我一生だけは思い出してやりたいというのが親の誠である。」「折にふれ物に感じて思い出すのが、せめてもの慰藉である、死者に対しての心づくしである。この悲は苦痛といえ、誠に苦痛であろう、しかし親はこの苦痛の去ることを欲せぬのである」『国

文学史講話』の序「我が子の死」と書かれています。これが親の愛情であります。

今年もお盆を迎えます。真民先生にはお盆を詠った詩が残されています。そのなかのひとつをご紹介します。

#### お盆

亡くなった人たちに会える日を  
作って下さった  
釈迦牟尼世尊に  
心からお礼を申し上げよう  
そして亡くなった人たちが  
喜んで来て下さる  
楽しいお盆にしよう  
せっかく来て下さった方々を  
悲しませたり

落胆させたり  
もう来ないことにしようなど  
思わせたりしない  
心あたたかいお盆にしよう  
迎え火のうれしさ  
送り火のさびしさ  
そうした人間本然の心のかえって  
守られて生きる  
ありがたさを知ろう

亡き人の事を思い出すのも大事なご供養であります。いろんな方のおかげでお互い今日まで生きてこられました。感謝してお盆をお迎えしましょう。